

平成30年度

平和大使長崎派遣事業報告書

伝える

～ PEACE
&
LOVE ～



松 戸 市

目 次

平和大使長崎派遣事業にあたって	1
世界平和都市宣言	2
平和大使の役割	3
平和大使長崎派遣募集要項	4
平和大使名簿	6
平和大使長崎派遣行程	7
平和大使長崎派遣帰庁報告会	16
平和の集い	17
平和大使の報告	18
「平和とは」	並木 康輔 19
「長崎に行って」	藤井 拓真 21
「長崎派遣を終えてみて」	織田 舞衣子 23
「長崎派遣を通して感じたこと」	安藤 聡真 25
「本当の幸せ」	林田 唯零 27
「長崎で学んだこと」	南畝 亜美 29
「平和大使長崎派遣報告書」	高橋 ヒカル 31
「学んだことを生かして」	國崎 沙和子 32
「平和な『これから』のために」	犬尾 まり花 34
「二度と戦争をくり返さないために」	佐瀬 綾乃 36
「長崎に行って」	堀本 大雅 38
「平和へ」	大木 悠広 40
「長崎で学んだこと」	堀越 春生 42
「悲しい過去」	北原 早春香 44
「長崎に行って学んだこと」	平 水音 46
「平和大使になって学んだこと」	藤田 隆良 48
「平和の大切さ」	小山 杏奈 50
「長崎に行って学んだこと」	森田 和佳奈 52
「『核兵器の恐ろしさ』と『平和の大切さ』」	飛田 美紅 54
「平和な未来へと」	島岡 凜 56
「平和について知ってほしいこと」	富田 愛夢 58
「平和大使になって学んだこと」	関野 七海 60

派遣後の活動について	・・・・・・・・・・・・・・・・	62
長崎平和宣言（平成30年8月9日）	・・・・・・・・・・・・・・・・	65
歴代平和大使名簿	・・・・・・・・・・・・・・・・	70



～ 平和大使長崎派遣事業にあたって ～

本市は、「世界平和都市」を宣言して以来、毎年様々な平和事業を展開しており、その一つとして「平和大使長崎派遣事業」を実施しております。この事業は21世紀を担う市内中学生を原爆投下の地である長崎市に「平和大使」として派遣するもので、戦争の悲惨さ、核兵器の恐ろしさ、平和の尊さを学び、戦争や核兵器の無い平和な未来を築こうという心を育てていただくことを目的としております。平成20年度に始めた本事業は今年で第11回目を数え、延べ220名を平和大使に任命しました。

さて、今年の8月9日、長崎市平和公園において「被爆73周年 長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典」が開催されました。

式典には71の国と地域の代表と、約5,200人の参列者が集まり、原爆犠牲者の冥福を祈り黙とうを捧げました。このことから核兵器廃絶を求める声が世界的な流れになりつつあることが感じられます。

そして、長崎市長は式典の「長崎平和宣言」の中で、世界の皆さんに核兵器禁止条約が一日も早く発行されるよう、自分の国の政府と国会に条約の署名と批准を求めるよう要請し、日本政府には引き続き、唯一の戦争被爆国として核兵器禁止条約に賛同すること、核兵器のない世界に向けて「北東アジア非核兵器地帯」の実現に向けた努力をするよう求めました。また「文化や風習の異なる国の人たちと交流することで、相互理解を深めることも平和につながります。「平和の文化」を、市民社会の力で世界中に広げていきましょう。」と私たちに呼びかけました。

被爆者の平均年齢は82歳を超え、このままでは被爆体験や戦争体験の記憶は風化してしまう恐れがあります。悲惨な記憶を決して忘れないために、そして戦争や核兵器の無い平和な未来を実現していくために、私たちは、直接体験談を聞くことができる最後の世代として真実をしっかりと引き継ぎ、若い世代に継承するということが使命であると考えております。

併せて、世界平和都市宣言における、世界の恒久平和の達成を念願するという理念から、世界各地で続く紛争に対しても目を向け、様々な角度から、広い視野を持った施策を行う必要があると認識しているところです。

本事業を通して、平和大使が長崎の地で学び感じた被爆の実相や平和の尊さを周りの人に伝え、一步ずつでも平和な世界、平和な未来に近づくことを願い、今後も本事業を実施してまいりたいと考えております。

～ 世界平和都市宣言 ～

我が国は、世界で唯一の被爆国である。

何人も平和を愛し、平和への努力を続け、常に平和に暮らせるよう均しく希求しているところである。

しかし、現下の国際情勢は、緊張化の方向に進み市民に不安感を与えている。

かかる状況に鑑み、松戸市は日本国憲法の基本理念である平和精神にのっとり、平和の維持に努め、併せて非核三原則を遵守し、あらゆる核兵器の廃絶と世界の恒久平和の達成を念願し、世界平和都市をここに宣言する。

昭和60年3月4日 松戸市

• World Peace City Declaration

[英語]

March 4, 1985

In the past, our country has experienced the sadness from an Atom Bomb explosion.

This makes our nation determined that history will not be repeated.

All of us yearn for peace, continue making an effort to create peace, and wish that we all can live in a peaceful environment in the future.

However, presently around the world, international affairs are becoming increasingly tense and cause our citizens great concern.

In response to the present turmoil across the world, Matsudo City now more than ever, willfully observe the peaceful spirit that is the fundamental philosophy of the Japanese Constitution.

We will endeavor to maintain nationwide peace, comply with the three anti-nuclear principles and possess the desire to abolish all nuclear weapons and the accomplishment of permanent peace throughout the world.

Therefore, we now declare our city as the "World Peace City".

City of Matsudo

• 世界平和都市宣言

[中国語]

日本是世界唯一的核弹受难国。

我们热爱和平、为和平而奋斗、切望一个和平的生活环境。

但是、当今国际关系仍然紧张、市民深感忧虑。面对动荡的世界、松戸市郑重宣告本市将遵循日本国宪法基本理念、

高扬和平精神、为保障和平而尽力、坚持非核三原则、为在地球上废除所有核武器、

建立一个永久和平的世界而积极贡献力量。

～ 平和大使の役割 ～

- 1 松戸市世界平和都市宣言を知る。
- 2 松戸市の平和スローガンである「みんなで築こう世界の平和」という心を持つ。
- 3 平和への願いを込めた千羽鶴を作製して長崎に献呈する。
- 4 長崎を訪問するにあたって「原爆とはどんな兵器なのか」「戦争がどんなに悲惨なものなのか」などを学び、平和の大切さを認識する。
- 5 長崎市では「青少年ピースフォーラム」に参加して、全国の自治体及び地元長崎の青少年たちと一緒に平和について学び、語り合う。
- 6 長崎訪問終了後、感想や記録をまとめて報告する。
- 7 長崎訪問で経験したこと、思ったことなどを家族や友達などに伝えていく。

～ 平和大使長崎派遣募集要項 ～

中学生の皆さんへ

世界平和都市宣言事業 第11回「平和大使長崎派遣」大使募集要項



松戸市では、戦争や核兵器の無い平和な未来を築こうという心を育んでもらうため、長崎市で開催される「青少年ピースフォーラム」へ参加する中学生を募集します。

【 平和大使とは 】

・「平和大使」とは、松戸市の世界平和都市宣言に基づき、戦争や核兵器の悲惨さ、平和の尊さについて事前研修、派遣、事後研修を通じて知識を深め、そこで学んだことや感じたことを周りの人に語り伝えていくことが期待される人です。

【 対象 】

・市内中学校に在学する生徒で、戦争や核兵器の悲惨さ、平和の尊さについて学ぶ意欲があり、裏面の日程にある**事前研修、派遣、事後研修全てに参加できる人**を対象とします。※既に平和大使に任命された方は、対象となりません。

【 定員 】

・22名（申込者が定員を超える場合は抽選とします。）
引率：松戸市職員4名・添乗員1名

【 費用 】

・市の負担 松戸から長崎までの往復交通運賃、宿泊代、長崎での移動バス電車運賃、8/7の夕食、8/8、8/9の3食、8/10の朝食、昼食、12/2の昼食
・自己負担 事前研修等、会場(市内)までの交通費、8/7の昼食など

【 申込方法 】

・参加申込用紙に必要事項を記入して、任意の封筒に入れ学校に提出してください。

【 提出期限 】

・平成30年5月21日(月)までに学校へ提出

【 研修日程 】

1 事前研修

平和についてのオリエンテーションを行います。(自主学習)

- 7月 1日(日) 9:30～12:00 結団式及び第1回オリエンテーション
 青少年ピースフォーラム等の内容説明
- 7月16日(月) 10:00～15:00 第2回オリエンテーション
 戦争、原爆、平和についての自主学習
- 7月29日(日) 10:00～12:00 第3回オリエンテーション
 自主学習とスケジュールの確認

2 派遣研修

(1) 場所 : 長崎市

(2) 期間 : 8月7日(火)～8月10日(金) 3泊4日

(3) 内容 : 青少年ピースフォーラムへの参加等

〈青少年ピースフォーラム〉

8月9日の平和祈念式典にあわせて、全国の自治体が派遣する青少年と長崎市の青少年とが一緒に被爆の実相や平和の尊さを学習し、交流を深めることで平和意識の高揚を図ることを目的として長崎市が実施しています。主な内容として、平和祈念式典への参列、被爆体験講話、平和関連施設見学、平和学習会への参加を予定しております。

(4) 「平和大使長崎派遣」日程表

8/7(火)	松戸駅 → 羽田空港 → 長崎空港 → 長崎市内ホテル (自主学習)	
8/8(水)	午前	平和案内人のガイドによる被爆建造物見学 〈場所:原爆落下中心地公園、城山小学校など〉
	14:00～15:00	開会行事(被爆体験講話など) 〈場所:平和会館ホール〉
	15:10～17:20	参加型平和学習(屋内) 〈場所:平和会館ホール〉→原爆資料館見学
8/9(木)	午前	平和祈念式典への参列 〈場所:平和公園 ※人数の都合上、別会場になる可能性があります。〉
	13:30～15:30	参加型平和学習(屋内) 〈場所:平和会館ホール〉
8/10(金)	ホテル → 長崎空港 → 羽田空港 → 市役所帰庁 → 帰庁報告会 → 市役所解散	

3 事後研修

8月24日(金) 平和大使長崎派遣報告書(作文)の提出

※提出期限 派遣研修で学んだ成果を生かし、戦争や核兵器の悲惨さや平和の大切さを伝えるため、平和大使長崎派遣報告書を作成します。

12月 2日(日) 松戸市平和事業「平和の集い」に参加します。

～ 平和大使名簿 ～

なみき 並木	こうすけ 康輔	(第一中学校 1学年)
ふじい 藤井	たくま 拓真	(第二中学校 2学年)
おだ 織田	まいこ 舞衣子	(第三中学校 1学年)
あんどう 安藤	そうま 聡真	(第四中学校 2学年)
はやしだ 林田	ゆいな 唯雫	(第五中学校 2学年)
のうね 南畝	あみ 亜美	(第五中学校 3学年)
たかはし 高橋	ヒカル ヒカル	(第六中学校 2学年)
くにさき 國崎	さわこ 沙和子	(小金中学校 2学年)
いぬお 犬尾	まりか まり花	(常盤平中学校 1学年)
させ 佐瀬	あやの 綾乃	(六実中学校 1学年)
ほりもと 堀本	たいが 大雅	(小金南中学校 1学年)
おおき 大木	はると 悠広	(小金南中学校 3学年)
ほりこし 堀越	はるき 春生	(古ヶ崎中学校 1学年)
きたはら 北原	はるか 早春香	(根木内中学校 1学年)
たいら 平	みね 水音	(河原塚中学校 2学年)
ふじた 藤田	たからみ 隆良	(新松戸南中学校 2学年)
こやま 小山	あんな 杏奈	(金ヶ作中学校 1学年)
もりた 森田	わか 和佳奈	(金ヶ作中学校 1学年)
とびた 飛田	みく 美紅	(和名ヶ谷中学校 1学年)
しまおか 島岡	りん 凜	(小金北中学校 1学年)
とみた 富田	めくむ 愛夢	(小金北中学校 3学年)
せきの 関野	ななみ 七海	(専修大学松戸中学校 2学年)

～ 平和大使長崎派遣行程 ～

7月1日（日）

◆結団式・第1回オリエンテーション (市役所議会棟3階特別委員会室にて)

結団式では各学校から選ばれた平和大使22名に任命証が交付され、一人ひとり大使としての抱負を発表しました。

オリエンテーションでは自己紹介をするとともに事業の目的や大使の役割を確認し、青少年ピースフォーラムの説明を受けました。



〈任命証交付〉



〈平和大使長崎派遣結団式〉



〈オリエンテーション〉

7月16日（月）

◆第2回オリエンテーション（市役所別館地下1階研修室にて）

長崎派遣に向けて、先輩大使から体験談を話していただきました。現地の様子を知ること
で、平和学習に臨む意識が高まりました。また、リーダー・サブリーダーや派遣中のルー
ルなどの必要事項を話し合っ
て決め、コミュニケーションを図りました。

午後はグループになり、それぞれが考える平和について意見交換をしました。そして、グ
ループごとに発表をして「平和大使が考える平和」として意見を集約しました。

※意見を集約したものは、市主催の平和パネル・ポスター展にて市民の皆様にご覧いただきました。



〈先輩大使の体験談〉



〈リーダーを中心に必要事項決定〉



〈グループワーク〉



〈平和パネル・ポスター展の様子〉

7月29日（日）

◆第3回オリエンテーション（市役所別館地下1階研修室にて）

長崎派遣のスケジュールと注意事項を確認した後、原爆資料館に献呈する千羽鶴を作るた
め、各自が折った折り鶴と市民の方々が折ってくれた鶴を平和への願いを込めて糸でつな
いでいきました。



〈スケジュール確認〉



〈千羽鶴作製〉

8月7日（火）

◆9：24 長崎へ出発

9時00分松戸駅に集合し、出発式を行い、家族や関係者に見送られて松戸駅を出発しました。12時30分羽田空港発の日本航空609便に搭乗し、14時20分長崎空港に到着、バスで長崎市内の宿泊ホテルへ向かい、16時00分頃ホテルに到着しました。



〈出発式〉



〈羽田空港出発ロビー〉

◆16：40 自主学习（立山防空壕見学）

ホテル到着後、徒歩で長崎県防空本部があった立山防空壕に行きました。ここでは、戦時中県知事などが警備や救護などの指揮を行っていた場所で、原爆投下時はここから国へ被害情報を伝えたそうです。その役割を管理人の方が説明してくださり防空壕内を見学しました。



〈立山防空壕〉

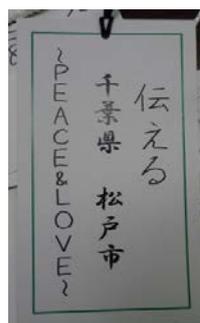
◆19：00 千羽鶴作製（ホテル会議室にて）

原爆資料館へ献呈するため、大使が作製した折り鶴と市民の方々からいただいた折り鶴で千羽鶴を完成させました。また、平和への想いを込めた千羽鶴に添える標語を大使皆で考え「伝える ～PEACE & LOVE～」に決めました。

※この標語は「愛が平和を支える」という想いを込めて決定しました。



〈千羽鶴作製〉



〈標語決定〉



〈千羽鶴完成〉

8月8日（水）

◆9:00 自主学習（被爆建造物見学）

朝7時55分にホテルを出発し、路面電車に乗り、被爆建造物見学へ向かいました。

見学は2班体制で、それぞれボランティアの平和案内人によるガイドのもと、原爆落下中心地、城山小学校、平和公園を約2時間かけて歩いて巡りました。ガイドの方が、当時の悲惨な様子をわかりやすく説明してくれました。熱心に説明を聞きながら貴重な被爆建造物を見学し、当時の状況を学びました。



〈原爆落下中心地碑〉



〈浦上天主堂遺壁〉



〈少年平和像（城山小学校内）〉



〈被爆校舎（城山小学校平和祈念館）〉



〈平和の泉（平和公園内）〉



〈平和祈念像（平和公園内）〉

◆12:45 千羽鶴献呈（原爆資料館にて）

昼食後、前日大使が完成させた千羽鶴と、市民の方々からいただいた千羽鶴を原爆資料館に献呈しました。



〈千羽鶴献呈〉

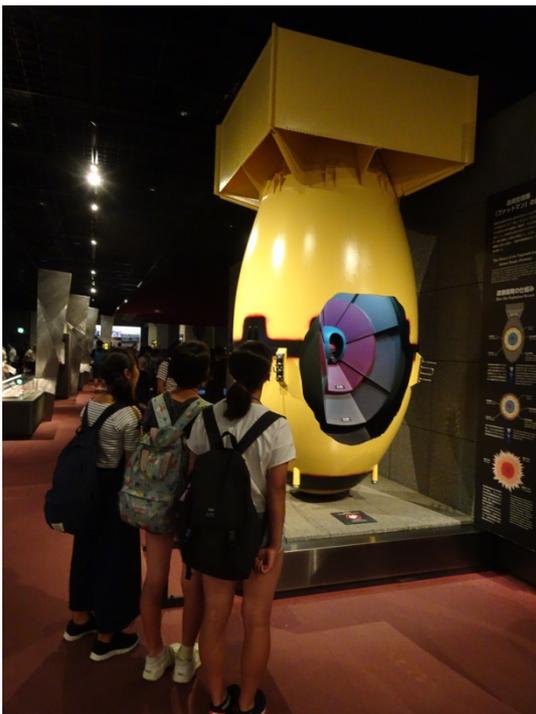


〈松戸市の千羽鶴〉



◆12:50 自主学習（原爆資料館見学）

千羽鶴を献呈した後、原爆資料館を見学しました。資料館には、原子爆弾の実物大模型や原爆の被害を受けた物品、被爆された方の写真など、資料がたくさん展示されており、被害の悲惨さを目の当たりにしました。



〈原子爆弾「ファットマン」の実物大模型〉



〈原爆の被害を受けた物品など〉



◆14：00 青少年ピースフォーラム（開会行事）参加
（長崎市平和会館にて）

青少年ピースフォーラムには、全国から多くの小・中・高校生が参加しました。開会行事では、地元高校生や大学生の青少年ピースボランティアによる開会宣言、長崎市長挨拶の後、青少年ピースボランティアとFUNK I S T 染谷西郷さんによる歌のプレゼントを聴き、小峰秀孝さんによる被爆体験講話を聞きました。



〈歌のプレゼント〉



〈被爆体験講話〉

◆15：25 青少年ピースフォーラム（平和学習）参加
（長崎市平和会館にて）

続いて、青少年ピースボランティアの進行による平和学習に移りました。参加者全員がグループ毎に分かれて、自己紹介レクリエーションで緊張をほぐした後、紙芝居とスライドで被爆の実相を学びました。その後、原爆資料館周辺を巡るフィールドワークに参加し、1日目の青少年ピースフォーラムが終了しました。



〈紙芝居〉



〈フィールドワーク〉

◆18：10 山王神社の一本柱鳥居見学

1日目の青少年ピースフォーラム終了後、爆心地から南南東約800メートルの高台にある山王神社の一本柱鳥居（二の鳥居）を見学しました。鳥居は原爆被害を受けつつも、当時と同じ場所に立っています。片方の柱で立つ姿は、原爆のすさまじさを物語っていました。



〈山王神社の一本柱鳥居〉

8月9日（木）

◆10:40 平和祈念式典参列（平和公園・原爆資料館ホールにて）

「被爆73周年 長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典」参列の日を迎えました。

朝8時45分にホテルを出発し、大使たちは平和公園で参列する組と原爆資料館ホールで参列する組2班に分かれて、それぞれ緊張した面持ちで会場に入りました。

厳粛な空気の中、式典が行われ、原爆投下時刻の午前11時2分、サイレンと長崎の鐘が鳴り響きました。原爆犠牲者のご冥福と世界の恒久平和を祈り、黙とうを捧げました。

被爆73周年
長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典

式次第

- 10時40分 被爆者合唱
- 10時45分 開式
 - 46分 原爆死没者名奉安
 - 48分 式辞（長崎市議会議長）
 - 52分 献水
 - 54分 献花
- 11時02分 黙とう
 - 03分 長崎平和宣言（長崎市長）
 - 12分 平和への誓い
 - 19分 児童合唱
 - 24分 来賓挨拶
 - 40分 合唱 千羽鶴
 - 45分 閉式



〈平和公園での黙とうの様子〉



〈原爆資料館での黙とうの様子〉



〈平和祈念像〉



〈ハンドベルの演奏（原爆資料館ホール）〉

◆13:30 青少年ピースフォーラム（平和学習）参加
 （長崎市平和会館にて）

午後は、前日に引き続き、青少年ピースフォーラムに参加しました。グループとなり、前日の平和学習を踏まえて「戦争の原因ってなんだろう？」を考え、そのうえで「なぜ戦争が起こるのか」「どうしたら戦争がなくなるのか」をテーマに、意見交換をしました。そして各々が「My 平和宣言」を作りました。

グループ発表では、大使たちは班の代表として発表するなど、積極的に取り組みました。

2日間の青少年ピースフォーラムを通じて、全国から集まった同年代の参加者と交流ができ、大変貴重な体験となりました。



〈意見交換〉



〈発表〉



〈グループ写真〉



〈参加者集合写真〉

世界平和祈念行事実行委員会（事務局：長崎市被爆継承課）が開催した「平成30年度世界平和祈念ポスター・標語展」への応募者のうち2名の大使が、標語部門・中学の部で、賞を受賞しました。2名には会長である長崎市長から賞状が送られました。その大使と標語を紹介します。

佳作

河原塚中学校 2年 平 水音
 「未来に 平和を プレゼント」

努力賞

小金中学校 2年 國崎 沙和子
 「1つでも 1人でも
 想いがあれば未来はかわる」



〈平さん〉



〈國崎さん〉

◆19:40 自由学習(グラバー園見学)

青少年ピースフォーラムを終え、夕食後、自由学習に向かいました。

大浦天主堂下を通り、グラバー園を散策しました。グラバー園から見た長崎の夜景は美しく、大使たちの良い思い出となりました。



〈大浦天主堂下〉



〈グラバー園〉

8月10日(金)

◆8:00 松戸へ出発

4日間お世話になったホテルの方にあいさつし、バスで長崎空港へ向かいました。

10時15分長崎空港発の日本航空608便に搭乗し、長崎を後にしました。飛行機の中では、各々が帰庁報告会に向けて準備をしました。

12時00分羽田空港到着。市の迎えのバスで、市役所へ向かいました。

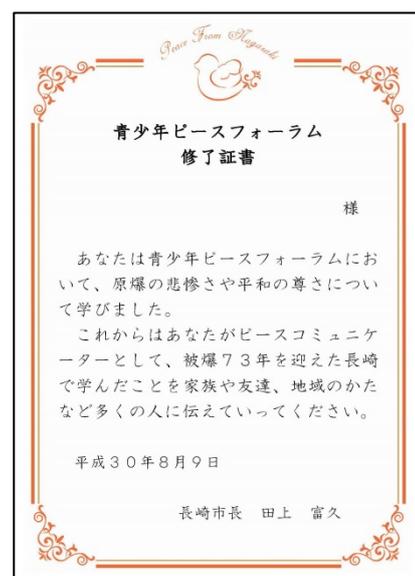
◆14:30 松戸市役所到着

スムーズに松戸市役所に到着。皆、元気で帰ってくることができました。

帰庁報告会が始まる前に、大使一人ひとりに青少年ピースフォーラムの修了証書が渡されました。



〈修了証書授与〉



〈修了証書〉

～ 平和大使長崎派遣帰庁報告会 ～

◆15:00 帰庁報告会（市役所議会棟3階特別委員会室にて）

市長をはじめ、出迎えてくれた家族に、長崎で見て、聞いて、体験したこと、また派遣を通して新たに感じた平和への思いなどを一人ひとり報告し、4日間の派遣日程を終えました。



〈帰庁報告の様子〉



〈青少年ピースフォーラム修了証書を手に集合写真〉

～ 平和の集い ～

12月2日（日）

◆13:00 平和大使長崎派遣報告会（松戸市民劇場にて）

「平和の集い」の中で、大使の役割を果たすべく、長崎派遣を通して学んだことや感じたことを、市民の皆様に報告しました。

スクリーンに映し出した写真などに合わせて、事業の目的や大使の役割、結団式から長崎派遣、そして帰庁報告会までの流れを紹介するとともに、場面ごとに学んだことや感じたことを伝えました。



今年で戦後 73年が経ちました。私たちの周りでは、戦争を実際に体験した方々が高齢になり、少なくなっているため、直接お話を聞くことがだんだん難しくなっています。

しかし、戦争で命を落とした犠牲者や被爆者の方々の思いを無駄にしないために、そして今後の平和を実現していくために一番重要なことは、私たち平和大使を含めた未来を担う若い世代が、平和への関心を高め、その大切さを代々受け継いで行くことだと思います。

私たちは、長崎で見て聞いて感じた戦争の悲惨さ、核兵器の恐ろしさ、平和の尊さをたくさんの人に伝え、次の世代に、未来の人々に伝えていくよう活動していきます。

平和大使の報告



「平和とは」

第一中学校 1年 並木 康輔

73年前の8月9日11時2分、あの空の上で一体何が起きたのだろう。平和な街、平和な家族を一瞬にして奪い、当たり前を次々に奪っていった。長崎の街を一瞬にして奪った原子爆弾「ファットマン」は被爆者の方々に心身ともに深い傷を与えたのだ。その他にも目で見ることのできない放射線の被害により、今もなお苦しんでいる人がいるのです。

僕は長崎に行き、二つのことが心に残っています。

一つ目は「青少年ピースフォーラム」です。ピースフォーラムでは全国の小中高校生と平和について考えました。一日目の屋外学習では国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館を見学し、その中にある手記展示コーナーには、被爆者や遺族の方々などから寄せられた被爆体験記がありました。また、死没者名簿が納められていて、死没者名簿は183冊あるそうです。ですが、その中の一冊だけは白紙であると言いました。なぜ白紙かと言うと、原爆により行方不明になってしまい、いまだ見つからない方のために残しているそうです。二日目はグループワークを行いました。グループワークでは戦争が起こった原因について考え、その解決策も考えました。それぞれが異なる意見で、平和について改めて学習することができました。また、全国から来た小中高校生と交流ができて良い経験になりました。

二つ目は、長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典に参列したことです。平和祈

念式典では、長崎市田上市長や安倍首相がスピーチの中で「世界で核兵器廃絶を求める動きが出てきている。」と話されていました。こうした動きは、世界でも注目され被爆者の方も期待をしていました。また、田上市長が被爆者の平均年齢が82歳を超えたと話されていました。年齢を考えると僕たちが被爆者の直接話を聞ける最後の世代かもしれないと思いました。僕たちは、心から黙とうを捧げました。

被爆者の方から直接話を聞ける機会が年々少なくなっています。そうした中で僕たちが、長崎で学んだことを伝え、平和を築きあげていくことが平和な未来へ繋がると思います。

「長崎に行って」

第二中学校 2年 藤井 拓真

僕は長崎に行き、二つのことから戦争の恐ろしさを学びました。

一つ目は、被爆者の小峰さんの講話を聞いたことです。小峰さんは原子爆弾により体に大きな火傷を負ってしまいました。また、熱で足が溶けてしまい、形が変わっていました。小峰さんは何度も自殺をしようと思いましたが「家族の愛」で救われたそうです。僕はその話を聞いて、家族の愛はすごいな、と思いました。そして、もう二度と戦争を起こしてはいけないと思いました。

二つ目は、資料館で写真を見たことです。写真には、人の骨が辺りに枝のようにたくさん散らばっていました。また、亡くなった方にはハエがたくさんたかり、火傷した人たちにはうじ虫などが大量に発生している様子が収められていました。他にも、人が黒こげになっている写真や川の上に浮いている人の写真も見ました。僕は、さっきまで話をしていた人が黒こげになることや、誰だか分からない骨になってしまうことを想像すると信じられませんでした。このような目には絶対あいたくないと思いました。そして、このような光景も見たくありません。被爆者の方は「こんなにつらい思いをするのは私たちだけで良い」と言っていました。

僕は長崎に行って、このような戦争の悲惨な資料を見て平和の尊さについて学んできました。これからは、長崎で学んできたことを、家族や学校の友達などに伝えていきたいと思います。また、このようなイベントに参加させ

ていただき本当にありがとうございました。

「長崎派遣を終えてみて」

第三中学校 1年 織田 舞衣子

私は、今回の平和大使長崎派遣で大変貴重な経験をすることができました。その中で特に印象的だったことを三つ報告したいと思います。

まず初めに、原爆資料館で、原爆投下によって残された物や映像、写真を実際に自分の目で見て、本や教科書では学べない「原爆の本当の怖さ」を知ったことです。原爆によって、人のものとは思えない形に変形してしまった足や放射線の影響で髪の毛が全部抜けてしまった頭、紫色になった皮膚の写真を見て、強い衝撃を受けました。さらに、実物と同じ大きさの原子爆弾の展示を見た時、原爆の恐ろしさを肌で感じました。73年前、約7万4千人の命をうばった原子爆弾の長さが約3.25メートルと想像以上に小さく、この一発の原子爆弾が長崎を一瞬にして、焼け野原にしてしまったことを想像すると、とても恐ろしいものだと思いました。

二つ目は、語り部の方の被爆体験講話を聞いたことです。4才の時に被爆された語り部の小峰さんは、原爆で両手や両足、お腹に火傷を負い「被爆者だから」という理由で仕事に就けなかったり、結婚できなかったり、多くの差別を受けてきました。しかし、未来を良くしようと戦争や原爆の恐ろしさを次の世代に伝えていくために、日々、一生懸命に努力されています。私はその姿に尊敬の念と感謝の気持ちでいっぱいになりました。

三つ目は、青少年ピースフォーラムに参加し「なぜ戦争が起こるのか」「ど

うしたら戦争がなくなるのか」を全国の平和大使と意見交換し、平和への理解を深めたことです。私たちの班では「たとえ自分と考えが違ったとしても、まずはお互いを知り、話し合い、認め合い、受け入れることで戦争は起こらないのではないか」という意見にまとまりました。

私は、今回の経験を通して、今当たり前の生活を送ることができていることに対し、平和のありがたさを感じました。今年、被爆者の平均年齢が82歳を超えました。私たちは、被爆者から直接話を聞ける最後の世代です。そのため、今回長崎で学んだことをしっかりと自分の中で見つめ直し、一人でも多くの人に戦争の悲惨さや平和の大切さを伝えていきたいと思います。そして、二度と戦争が起こることのないように平和な世の中を、まず私が追求していきたいです。

「長崎派遣を通して感じたこと」

第四中学校 2年 安藤 聡真

「戦争は、二度と起してはならない。」と被爆者の小峰さんが言った。

僕は、長崎派遣二日目に青少年ピースフォーラムに参加した。そこでは、実際に被爆された、小峰さんのお話を聞いた。1945年8月9日、長崎に原子爆弾が落とされ、小峰さんは体にとっても大きな傷が残ってしまった。原子爆弾が落とされてからしばらく時間が経ち、小峰さんは学校に行った。学校に行くと、すぐにいじめっ子達にいじめられた。変なあだ名も付けられた。小峰さんは死にたいと思った。ある冬の日、被爆によって火傷を負った右足首を曲げることができなくなってしまったため、学校に1時間かけて行った。当然、その頃は歩く靴もなかったため、裸足で学校に行った。冬で気温がとても低かったから、足の感覚はまひしていた。小峰さんは、恥ずかしくて涙した。そして、またいじめられた。小峰さんは学校に行くのが嫌で、母にこう言ったそうだ。「お母ちゃん、みんなが僕をバカにしてくる。もう学校になんて行きたくない。」しかし、母は、小峰さんを寒い雪の中を転がしてでも学校に行かせた。この時は、母が憎くて母の顔を見なかった。けれども、「今考えれば母は泣いていた。」と小峰さんは語ってくれた。小峰さんは自殺を何度も考えたそうだ。当時、被爆された人の自殺がとても多かったそうだ。汽車に突っ込んで死ぬということが週に2回はあったそうだ。それから小峰さんは学校でいじめられた。学校から家に帰り、小峰さんは母に「い

じめっ子が憎い。アメリカが憎い。」と言った。すると母はこう言った「憎むところが違う。戦争や核兵器を憎め。」と。

しばらく時が経ち、小峰さんは就職する時期になった。小峰さんはやりたいことが三つあった。一つ目は寿司屋。二つ目はクリーニング屋。三つ目は、理容師だ。どれもだめだった。理由は、被爆したときにできた大きな傷だった。小峰さんは、被爆したときにできた傷が原因で、その後の人生も狂わされた。いじめられた。妻にも裏切られた。

僕は話を聞いている時に、胸が痛くなった。「あの戦争がなければ、このように辛い思いをする人はいなかったのに。」と思った。もう二度とあのようなことが起きないように、二度と苦しむ人がでないように。これから、戦争や核兵器の悲惨さや平和の大切さを発信していこうと思う。

「本当の幸せ」

第五中学校 2年 林田 唯雫

小さなことで親に叱られたり、宿題が全然終わらなかつたり、できると思っていたことが思ったより上手くいかなかつたりと、私が思う「不幸せなこと」は、果たして本当に「不幸せなこと」なのだろうか。長崎へ行ってから、ふとそう思うようになった。

1945年8月9日、午前11時2分。長崎の空に上がったきのご雲の下で、人々は何を思っただろうか。もはや、そう思えるだけの時間すら残されていなかったかもしれない。

原爆資料館には、11時2分を指して止まった時計、実物大の原子爆弾の模型、黒こげになった死体の写真など、私の日常とはまるで接点のない衝撃的な資料がたくさん展示されていた。一緒に見て回っていた平和大使も私も思わず押し黙り、資料館を出ても口数が減ってしまうほどだった。初めて目にした「本当の」原爆の被害の大きさ。「悲しい」とか「残念」とか「かわいそう」とか。そのような言葉がとっさに思い浮かんだけれど、目の前の事実になんかそのような言葉すら発してはいけないような気がした。そして、私は自分が置かれている環境が、どんなに幸せなのかということに気が付いた。

「生きているだけで幸せ」という言葉にも実感が持てた。だからこそ、命と一緒に幸せすら奪っていく核兵器を必死で無くそうとしている人がいることを忘れてはいけないと感じた。

今回、私は長崎で「原爆の爪痕」とともに「本当の幸せ」を学んだ。

これを世界の人々にもわかってもらうことが、現代に生きる私たちの務めとも言えるのではないだろうか。

「長崎で学んだこと」

第五中学校 3年 南畝 亜美

私は、学校で戦争について習い、実際に長崎に行き、戦争や核兵器の恐ろしさを学びたい、と思ったので平和大使長崎派遣に応募しました。

派遣二日目に、平和公園や城山小学校、原爆資料館を見ました。平和公園には平和への願いを象徴するとても大きな平和祈念像がありました。そこで「天を指す右手は原爆の脅威を、水平に伸ばした左手は長崎の未来（平和）を示している。」と平和案内人から教わりました。城山小学校では、校舎の中に原子爆弾が落とされた当時のまま残されているところがあり、その場にいた生徒たちのことを思うと言葉では言い表せないほど悲惨な状況だったことを感じとることができました。また、原爆資料館では、長崎に投下された原子爆弾ファットマンの実物大の模型や目を背けたくなる写真や映像を見て、戦争や原子爆弾の恐ろしさを感じることができました。

二日目の午後と三日目の午後は、青少年ピースフォーラムに参加しました。最初に被爆者の小峰さんの話を聞きました。小峰さんは、被爆者だからという理由でいじめを受けたり、結婚が許されなかったりとひどい差別を受けてきました。原子爆弾は、人間が人間でいられなくなってしまう核兵器です。ピースフォーラムでは、なぜ戦争が起きてしまうのか、それはどう解決すればよいのかを話し合いました。私は班の代表として発表をしました。他にも、積極的に意見が言えたのでよかったです。

派遣された四日間で、原爆資料館の見学や被爆体験講話を聞き、原爆や戦争の恐ろしさや悲惨さを学びました。

被爆者の方の平均年齢を考えると私たちは生の声を聞ける最後の世代かもしれません。この先も平和や戦争について学んでいき、この平和大使長崎派遣で体験したことをたくさんの人に伝えていきたいです。

「平和大使長崎派遣報告書」

第六中学校 2年 高橋 ヒカル

私が「平和大使長崎派遣」を通して感じたことは、平和の尊さです。

原爆資料館で、原子爆弾の熱線により皮膚が溶けてしまっている親子や、人骨に囲まれて座っている少女など、どれも目を背けてしまいたくなるようなものばかりでした。また、全国の小中高校生と平和について話し合うピースフォーラムに参加し、話し合いを深めていく中で、より平和な未来を創っていくことがどれだけ難しいことなのかを感じました。被爆体験講話では、被爆者の小峰さんから「原爆で受けた火傷によって、足の形が変形してしまい、『くされ足』などと言われ、いじめを受けた」と聞きました。私だったら「被爆したことでいじめ続けられる毎日に耐えることができない」と思いました。

私はこの体験を通して、改めて平和な日常の大切さを感じることができました。だからこそ、もう二度と被爆者を生まないように、この世界から核兵器が無くなるように、今回私が見たこと、聞いたことを一人でも多くの人に伝えていきたいと思います。

「学んだことを生かして」

小金中学校 2年 國崎 沙和子

私は73年前のあの日、原子雲の下で何が起きたのか、詳しいことをよく知りませんでした。しかし、今回の派遣で原爆についてたくさんのことを学ぶことができました。

昭和20年8月9日、長崎に原子爆弾が投下されました。午前11時2分に原子爆弾が炸裂し、一瞬にして人や動物、植物の生命を奪いました。長崎の街は、一発の原子爆弾によって死の街となりました。一命を取りとめた人々は、重い後遺症に苦しみ、厳しい差別を受けました。「とても辛かった」と被爆者の方は話してくれました。このお話は、青少年ピースフォーラムで聞きました。私は、ピースフォーラムが一番印象に残っています。

ピースフォーラムでは、全国の小・中・高校生が集まって平和について意見交換を行いました。たくさん意見が飛び交いましたが、どれも納得させられるものばかりでした。色々な意見があっても、最後には話し合いで一つの意見にまとめることができ、なぜ世界ではなかなか話し合いが行われないのか、また、行われてもなぜ戦争が起こるのか不思議に思いました。

二日目のピースフォーラムの前に見学した原爆資料館には、直視できないような酷い写真が多くありました。展示物を見ただけで、原爆の本当の恐ろしさが伝わってきて、背中がゾワッとしました。戦争しても良いことは一つも無く、巻き込まれた人々の人生をめちゃくちゃにしてしまうだけなのに、

戦争をしてしまう人間の愚かさを憎く感じました。

ある調査では、全国で原爆が投下された年月日を正しく答えられる人の割合が約3割という結果もでています。また、被爆者の高齢化が進み、直接お話をきけるのは私たちが最後の世代になります。長崎や広島で起きた悲劇を風化させないために、私にできることは伝えることです。被爆者の方の体験や、強い想い、原爆・戦争の恐ろしさを少しでも多くの人に伝え、共に平和について考えたいです。私は長崎を最後の被爆地にするために自ら行動を起こしていこうと思います。

「平和な『これから』のために」

常盤平中学校 1年 犬尾 まり花

ガラス瓶をでこぼこにしてしまう熱線。建物を粉々にした爆風。後遺症として、発がんの可能性を高める放射線。三つの被害をもたらす原子爆弾は、8月6日の広島に続き、8月9日午前11時2分に長崎に投下されました。

私は「平和大使長崎派遣」に平和な「未来へ」のヒントを探すために参加しました。そこで、いかに核兵器が非人道的で人間が持つてはいけないものか、ということだけではなく、戦争の恐ろしさ、愚かさ、平和がどれだけ尊いものかを学びました。

核兵器の残酷さは、原爆資料館と被爆体験講話から学ぶことができました。原爆資料館では11時2分を指して止まった時計やいくつものガラスの破片が刺さった作業着、熱線で溶けたガラスに埋まった手の骨などの資料は、受けた熱線がどれだけ強いものだったかを物語っていました。中でも一番印象に残った展示物は、焦げた板壁に残った葉の影です。影は普通、同じ場所に存在し続けるものではありません。しかし、それはくっきりと、板に誰かが描いたようにそこにありました。私は不気味だなと思いました。

青少年ピースフォーラムでは、被爆者の小峰さんから直接被爆体験を聞きました。小峰さんは、被爆した瞬間だけではなく、その後の人生で被爆者として差別を受け、結婚、就職にも支障をきたしたそうです。そして、自分がいつ死ぬかわからない恐怖をかかえながら今を生きていることも、話してく

ださいました。「被爆者の体験談」と「原爆資料館の展示」が合わさって、被害がより一層生々しく感じられ、核兵器を作る、持つ、使うことがどれだけ残酷非道な行為なのかを再認識できました。

「長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典」では「日本国憲法に込められた思い」と「非核三原則」「核を核で抑止することはできないこと」「戦争で得られるものは、血と涙と憎しみだけであること」を学び、改めて平和の大切さを感じました。

私が今、平和のためにできることは、周りの人々に今回の経験を伝えることです。さらに、大人になれば、インターネットで発言したり、本を書いたりすることもできるようになり、私は「武力を使わずに争いを解決すべきであること」「なぜ核兵器を持ってはいけないか」「その時に起きている問題についてどうあるべきか」などを発信して、「平和」を広めていきたいです。

「二度と戦争をくり返さないために」

六実中学校 1年 佐瀬 綾乃

私が平和大使に応募した理由は二つありました。一つ目は、小学校6年生の時、長崎で被爆した方の話を直接聞ける機会があり、戦争について詳しく知りたいと思ったからです。二つ目は、戦後73年が経過し、戦争体験を語れる方が減ってきているので、被爆者の方から直接お話を聞いてみたいと思ったからです。松戸市の平和事業のことを知った時、ぜひ応募したいと思いました。

最初は、他の中学校の大使と仲良くなれるか不安でしたが、話してみるとみんな優しくてほっとしました。そして3回のオリエンテーションの中で、事前学習として各グループで平和について話し合ったとき、みんな平和への思いが強く、たくさんの意見を出していて圧倒されました。「そこまで調べているのか」「そこまで考えているのか」と思いました。松戸市の代表として行くのだから「自分ももっとたくさん調べて、他市の小・中・高校生に負けないように発言しなければ」と責任感を感じました。

長崎に行って一番印象に残ったことは青少年ピースフォーラムで被爆者の方からお話を聞いたことです。被爆者の小峰さんは長崎で被爆して、両手、両足、腹部に火傷を負いました。被爆者だからというだけで仕事に就けなかったり、いじめを受けたりしたと聞きました。さらにこのような差別を受けてきた人が何人もいるとのことでした。私は、この話を聞いて「たった一つ

の原子爆弾で悲しい思いをするなんて可哀想。ひどい。」と思いました。そして、私はこの話を聞いてMY平和宣言に、「思いやりを大切にする！」と書きました。相手のことをよく考えて思いやりを持てば戦争は生まれない、と思い、この言葉を選びました。この他にも被爆建造物や資料館を見て、改めて原爆の悲惨さを感じました。

私は長崎に行き、たった一つの原子爆弾でたくさんの尊い命が奪われ、生きていく人の希望を失わせる原爆の恐ろしさを実感しました。これからは家族や友達など多くの人たちに長崎で学んだことを伝えていくことと、自分で考えたMY平和宣言を毎日実践していけるようにしたいです。

「長崎に行って」

小金南中学校 1年 堀本 大雅

僕は、長崎に行き、見たこと、聞いたこと、感じたことがたくさんありました。特に被爆者の方のお話が印象に残っています。教科書や本では知ることができないような貴重な経験をすることができました。

一日目に立山防空壕に行きました。立山防空壕は、原爆が投下された当時、長崎県知事室や警察部長室として使われていました。防空壕の中で現物資料を見ることで当時の様子を感じとることができました。

二日目の午前中に爆心地から約500mの位置にある城山小学校に行きました。そこには少年平和像があり、児童は登下校をする際に、一礼していました。ことにとても驚きました。午後からの青少年ピースフォーラムでは全国の平和大使たちと意見交換をして、平和について考えを深めることができたので良かったです。

三日目は、平和祈念式典に参列しました。もう二度とできないような貴重な経験ができたので良かったです。その日のピースフォーラムでは「どうしたら戦争がなくなるか」をテーマに班で話し合いました。みんなと同じような意見を持つ人や独特な意見を持つ人もいたため、まとめるのが難しかったです。みんな協力してまとめることができました。

このように僕は今回の長崎派遣で色々な体験をしましたが、一番頭に残っているのは、被爆者の小峰さんからのお話です。小峰さんは何も悪いことを

していないのに、たった一つの原子爆弾でその後の人生が変わってしまったことに可哀想だなと思いました。特に差別というものには心を動かされました。被爆による火傷で右足が変形してしまったことで、通っている学校の人たちから、いじめを受けました。当時は先生も見て見ぬフリをしていたそうです。

僕は、まず身近にある差別や争いを止めて、できることから取り組み、平和の大切さを周りに伝えていきたいと思います。

「平和へ」

小金南中学校 3年 大木 悠広

私は平和大使長崎派遣を通じて心境の変化があったと実感しました。それは平和に対する考え方です。今までは、平和とは地域同士が仲良くするもの、としか考えていませんでした。しかし、長崎に行き、被爆の実相を学び、心身のケアをすることが大事なことだと思いました。私は、この大事だと思ったことを友達や家族に伝えていますが、皆は「あたりまえ」ととらえています。確かに聞いただけでは「あたりまえ」ととらえるのは普通です。しかし、百聞は一見にしかず、と言うように、この派遣を有意義だったと感じました。私は青少年ピースフォーラムを通じてピースコミュニケーターになれたので、これからは「百見は一考にしかず、百考は一行にしかず」を目標とし、深く考え、多く行動したいと思います。そのために、まず今回の派遣のことを考えます。

1日目に行った立山防空壕は、原爆投下による被害はありませんでしたが、原爆投下による状況を国に正確に伝えた長崎県知事らが入っていた防空壕の中は涼しく多くの作業をしていた痕跡がありました。

2日目に行った城山小学校では、原爆投下により教頭ら数名しか生き残れませんでした。校内には、「嘉代子桜」や「少年平和像」「防空壕」などがあり、学校の生徒は少年平和像にあいさつをしていて感動しました。

3日目の平和祈念式典では原爆資料館ホールで参列しました。被爆者の合

唱は心からの願いだと思いました。また、各国代表の声明を聞いてよかったです。

4日目の帰庁報告会では、市長に報告しましたが、とても緊張しました。

私は、今回の派遣で学んだことを忘れることなく、周囲に伝えることで実行に移そうと思います。

「長崎で学んだこと」

古ヶ崎中学校 1年 堀越 春生

今回の長崎派遣で僕は初めて語り部の話を聞いた。

僕たちは被爆した方の話を生で聞ける最後の世代かもしれないと言われている。僕はそのような中、被爆者である小峰さんの話を聞かせていただくことができた。

小峰さんの体験講話では、終戦後の生活の苦しみや悲しみ、戦争が終わったからといって幸せになれた訳ではないことなど細かいところまで聞くことができた。戦争の恐ろしさを今まで以上に実感し、長崎で起こったことを詳しく知ることができた。この話は忘れてはいけない、多くの人に伝えていかなければならないと思った。

また、青少年ピースフォーラムに参加して、全国から参加している小・中・高校生と戦争についてグループで意見交換をする機会があった。僕たちはなぜ戦争が起こるのかを考えてグループでまとめた。

僕は、戦争が起きた原因は二つあると考えた。

一つはお金が欲しかったからである。日本は太平洋戦争の前の戦争で損害賠償としてたくさんのお金をもらった。そして、日本はそのお金で工場を建てた。しかし、もっと国を発展させるために工場を建てるお金が必要となった。そこで日本は手っ取り早くお金を得るために、戦争という手段を選んだのではないだろうか。

もう一つは国の力を見せつけたかったからである。それは、日本の当時の軍隊は強く、日本はそれを見せつけたかったのだと思う。

他の人の意見としては、核兵器の実験をしてみたかったからとの意見が出た。僕はその意見は違うと思った。なぜなら日本から戦争を始めたので、アメリカは原爆を落とそうなんて当初は思っていなかったのではないか。僕は日本がいつまでも降参しないということを理由に原爆を落としたのだと思う。

しかし、日本はお金がほしかったのであれば、工場の生産力を上げるなど、もっと他に方法を探すことができたのではないだろうか。

また、平和のために必要なことは何かを話し合った。

僕は互いに認め合うことが大切だと思った。

例えば、互いの文化を分かり合えていない民族がいる。互いを思いやり、互いの文化を受け入れることで認め合えるようになれるのではないだろうか。考えの違う人でも話し合いをし、譲り合うことで、平和に近付けるだろう。

日本は世界で唯一の被爆国として非核化を優先させるべきではないだろうか。平和祈念式典で代表として話をした被爆者は核の恐ろしさ、非核化の大切さを世界に伝え、また、安倍首相に核兵器禁止条約への署名を強く訴えていた。

これからの日本は、日本だから示せる道を世界に広めてほしいと僕は切望する。

「悲しい過去」

根木内中学校 1年 北原 早春香

私は今回長崎に行って、平和の尊さを改めて感じました。何よりも印象に残っているのは、被爆者の小峰さんのお話です。原爆投下により、両手、両足、腹部に火傷を負いました。特に右足の火傷はひどく、指はつながってしまい、何回も手術を受けました。学校に行く時にはく靴がなく、ひどく火傷を負った右足をひきずり、冬は冷たく感覚はまひし、泣きながら裸足で学校に通っていたそうです。学校ではいじめに遭いました。大人になり、貧しい家庭を助けるため働くことにしたそうですが、被爆者という理由で断られることがありました。結婚についても「被爆者は病気になる確率が高いから、結婚はやめろ」と周りの人から避けられました。私はこのような話を聞いてとても悲しくなりました。二度と同じことは絶対あってはならないと思います。

原爆資料館や青少年ピースフォーラムでは平和について考えました。原爆資料館では、11時2分のまま針が止まっている時計や原爆により黒く焦げた赤ちゃんの遺体の写真を見て、一瞬でこのような状態になってしまったことを考えるととても怖くなりました。他にも衝撃的な写真ばかりで、言葉が出ませんでした。原爆の恐ろしさがとてもよくわかりました。青少年ピースフォーラムでは、戦争が起こる原因を考えました。自分達の班では「話し合わないから」などの意見が出ました。戦って決めても何の意味もないと思い

ました。

今回の長崎派遣で私は平和祈念式典に参列しました。平和祈念式典では長崎市長や安倍首相の話や被爆者代表の平和への誓いを直接聞くことができ、映像で見るのとは違うなと思いました。

今回長崎に行くことができ、とてもいい経験になりました。しかし「行って学んだ。」で終わっては意味がありません。行ってみないと分からないことがたくさんありました。より多くの人に伝えることが私たちの役目だと思います。私が長崎で感じた思いをより多くの人に感じてもらいたいのので、学校や家族に伝えていきたいです。

「長崎に行って学んだこと」

河原塚中学校 2年 平 水音

私が長崎に行きたいと思った理由は、曾祖父が戦争を体験し、そのことについてもっと知りたいと思ったからです。初めてのオリエンテーションではまだ慣れませんでした。2回目以降のオリエンテーションでは慣れてきたので良かったです。

3回のオリエンテーションを経て8月7日、私は長崎に平和大使のみんなで行きました。2日目に、被爆建造物巡りと原爆資料館に行きました。原爆落下中心地には、原爆により爆死した方、被爆者でその後亡くなられた方の名前が書かれていました。また、平和公園や城山小学校にも行きました。城山小学校は、爆心地から西へ約500mのところにあります。多くの生徒、職員が一発の原爆によって命を奪われました。児童約1,500人のうち、約1,400人が亡くなりました。出勤していた職員32名のうち、29名が亡くなり、生存者は3名だけでした。原爆が落とされた後、小学校が再開しましたが、児童はわずか15名ほどでした。靴や机、そんなものは全て一発の原子爆弾で無くなりました。雨の日や雪の日もありましたが、先生が「危ないし、何かあったら怖いから、学校には来なくていい」と言いましたが、児童は必ず学校に行ったそうです。そのような日々が続いたのだと思うととてもかわいそうだな、と思いました。

原爆資料館では、とても無残な姿が見られました。がれきに挟まって動け

なくなっている馬の死体、黒こげになった赤ちゃんと母親、大火傷をした弟を兄がおぶって助けを求める姿など写真や映像がたくさんありました。想像するととても悲しくなってきました。

3日目は平和祈念式典が開催され、会場の都合上、私は平和公園に参列することができませんでした。参列したかったのでとても残念です。今回、長崎派遣に行き、平和についてたくさんのことを学ぶことができました。他にも全国から来た平和大使と意見交換したり、話したり、とてもよい経験になりました。

「平和大使になって学んだこと」

新松戸南中学校 2年 藤田 隆良

私はこの平和大使長崎派遣で二つのことについて深く考えました。

一つ目は原子爆弾の恐ろしさについてです。それは、たった一発で一瞬にして長崎の美しい街並みと人々の幸せな暮らしを、がれきと死の世界へと変えました。爆発の瞬間に多くの尊い命を奪いましたが、放射線は、生き残った人々の健康をむしばみました。また、長期間に渡り人々を苦しめたのは、周りからの差別や偏見、そしていじめを受けたことだと語り部の方から聞きました。結婚や仕事など、あたり前のことも邪魔され、悔しく悲しい思いをされたと聞き、なぜ被爆という大きな被害を受けた人々がさらに苦しめられなければならないのかと、強い怒りと驚きを覚えました。

二つ目は平和の尊さについてです。ひとたび戦争に巻き込まれれば幸せな時間は、一瞬にして消え去ってしまいます。戦争は人が死んだり、傷ついたりするだけではなく、悲しみや悔しさ、憎しみを残します。私は、平和は人類にとって最も重要な課題であり、必ず実現させなければならないと思いました。

今回私たちは、被爆者の方のお話を直接伺うという大変貴重な体験をしました。お話してくださった方々が思い出したくない悲しくて辛い話をしてくださったのは、今度は私たちのような次の世代に平和の尊さ、戦争の酷さを語り継いで欲しいと思われてのことだと思えます。

私は必ずこの平和のリレーをつなぐことを約束します。まずは友人などの周りの人達に。そして、将来の私の子供たちに。

今回、私は平和大使長崎派遣を通して、たくさんのことを学び、考える機会がありました。大変貴重な体験の場を与えてくださったことを感謝いたします。

「平和の大切さ」

金ヶ作中学校 1年 小山 杏奈

私はこの夏、73年前原子爆弾が落とされた長崎を訪れました。その中で、全国から集まった平和大使や、現地のピースボランティアの方々と平和や戦争、原子爆弾についてたくさん学びました。中でもとても心に残ったことが二つあります。

一つ目は、青少年ピースフォーラムでお話を聞いた小峰秀孝さんの話です。小峰さんは被爆当時4歳でした。家族は9人でしたが祖父は一週間後に亡くなってしまったそうです。小峰さんはその後小学校に入学し、入学してからいじめを受けていたと話してくれました。小峰さんに思い出したくないはずの過去を話して頂いたと思うと胸が痛みました。その話を聞いて、私たちがこのことをしっかり周りの人や次の世代に伝えていかないといけないと思いました。

二つ目は城山小学校や原爆資料館で見た展示物です。11時2分を指して止まってしまった時計や熱線の影響によって溶けて変形してしまったビン、どれも原爆の恐ろしさが伝わってきました。他にも放射線の後遺症で苦しんでいる方がたくさんいることを改めて知りました。

私は、今回の長崎派遣で、青少年ピースフォーラムに参加して平和の大切さを派遣前より深く考えるようになりました。被爆者の小峰さんのお話を聞き、城山小学校や原爆資料館の展示物を見て、平和の大切さ、尊さをより多

くの人に伝えていかなければならないと思いました。

今回のこの体験を通して原子爆弾がもたらす被害の悲惨さ、平和の大切さを学ぶことができました。とても貴重な体験ができたことに感謝して、周りの人、次の世代の人に伝えて、学習したことをこれからの生活に生かしていきたいです。

「長崎に行って学んだこと」

金ヶ作中学校 1年 森田 和佳奈

私は、長崎に行って戦争や核の恐ろしさについて詳しく知ることができました。

長崎でとても心に残ったことは二つあります。

一つ目は、被爆者の方の話を実際に聞いたことです。被爆体験を話してくださった小峰さんは、4歳の時に被爆され、全身に大火傷を負い、何度も手術を受けました。また、被爆者というだけで周りからいじめや差別を受けてきました。就職や結婚にもとても苦労したそうです。私はその話を聞いて、原爆は直接の被害だけではなく被爆者のその後の人生も苦しめていることを知り、このようなことはもう絶対あってはならないと思いました。

二つ目は、原爆資料館に行き、色々な展示物を見たことです。当時の子供の作文や、11時2分を指して止まった時計、多くの悲惨な写真などを見て核兵器の威力、恐ろしさを知りました。私は、今回長崎に行き、改めて平和の大切さについて学び、被爆者や全国から派遣された平和大使の人たちの意見を聞きながら平和について自分の考えも持てるようになりました。

城山小学校には少年平和像があります。城山小学校の児童は登下校時、この像にあいさつをします。私は実際にそれを見て、私よりも小さい長崎の小学生にも平和の大切さ、戦争の悲惨さがしっかりと伝わっているのだなと思いました。長崎や広島から遠い所に住んでいる私たちは今まで戦争の恐ろし

さを詳しく学ぶことがありませんでした。だからこそ私は、長崎に行って学んできたことをしっかりと周りの人達に伝えていこうと思います。

『核兵器の恐ろしさ』と『平和の大切さ』

和名ヶ谷中学校 1年 飛田 美紅

私は「核兵器の恐ろしさ」と「平和の大切さ」を自分の目で確認したいと思い、この事業に応募して、松戸市の平和大使として長崎に行くことができました。そこで私が学んだことは二つあります。

一つ目は、原爆の被害の大きさです。原爆の投下により、熱線で肉や骨まで露出するほど皮膚が焼きたただれ落ちてしまう人や、爆心地付近ではあまりの高熱で一瞬にして身体が炭のようになってしまう人もいたそうです。爆心地から一キロメートル以内のところでは、爆風で一般の家は粉々に吹き飛ばされ、学校などの大きな建物も形が大きく変形してしまうほどつぶれてしまったそうです。また、爆風で吹き飛ばされ、無数のガラス片や木片を全身に浴び、その威力は防空壕の中にも即死してしまう人もいたそうです。さらに放射線により生き残った人や救護活動を行った人の中にも放射線を浴びてしまい、身体の細胞が破壊されて、ガンなどの病気になって亡くなる人や後遺症にも苦しむ人もいたそうです。原爆による被害は、長崎市の人口約24万人のうち、死者が7万3,884人、負傷者が7万4,909人で、この他にも被害者がたくさんいました。私が想像していたよりもずっと大きな被害だったことを知り、改めて原爆の恐ろしさを実感しました。

二つ目は、被爆による後遺症で苦しむ、さらに差別を受けていた人がいたということです。今回、ピースフォーラムに参加して、実際に被害に遭った

方の話を聞くという貴重な体験が出来ました。私は今の自分の生活と比較しながら、当時を想像して話を聞かせていただきました。その方は、生き残ることはできたけれど、身体の半分は火傷でボロボロになり、歩行が困難なほどだったそうです。そのことから、学校でいじめや差別を受けることがあったり、被爆者であるという理由で自由に就職もできなかつたりしたそうです。生き残ることは出来たとしても苦勞が多く、もし自分がその立場だとしたら決して「幸せ」と言える人生ではないと思いました。

被爆者の方がこういった機会の中で、思い出したくもないようなことを分かり易く話してくださったのは、二度と戦争が起こらないように、原爆や戦争の悲惨さと平和の尊さを後世に伝えてほしいと願っているからだと思いました。その被爆者の方々の思いを伝えるのが、今回平和大使として長崎に行った私の使命だと思うので、私は家族や友達に今回の貴重な体験を伝え、しっかり使命を果たしたいと思います。そして、原爆や戦争のない平和な未来を築きたいと思います。

「平和な未来へと」

小金北中学校 1年 島岡 凜

私が今回、平和大使長崎派遣に応募した理由は、もともと学校で勉強していたことよりも多くのことを学びたいと思ったからです。教科書では伝わらなかった原爆の恐ろしさが、今回身にしみて伝わりました。

まず、青少年ピースフォーラム。ここでは、原爆や戦争とは何か、自分たちが戦争を二度と起さないためできることは何かを考えました。また、平和についても深く掘り下げることができました。全国から派遣されていた平和大使と意見交換をすることで、自分ができることを明確にすることができました。

次に、原爆資料館。ここは今回、一番多く学べた場所だと思います。今まで自分の中であやふやになっていた「原爆」というものが何なのか、はっきり自分の目で確かめることができました。正直、黒こげの赤ちゃん、ケロイドの写真など目を背けたくなるような資料、写真が多くあり胸が痛くなりました。実際に被爆を経験していない私たちでも、こんなに胸が痛くなるのだから、実際に被爆された方々は、とても辛い思いをされたと思います。

また、平和祈念式典では、被爆者の方々が思い出したくない辛い過去をお話してくださったり、歌詞に平和への願いを込めて歌ってくださり、心を打たれました。被爆者の方は私たちに多くの経験を話してくださいました。私はそれを家族にとどまらず、学校のみんなや友達など多くの人々に伝えてい

きます。

最後になりますが、私は今回、長崎で学べたことや貴重な体験をさせていただいたことにとっても感謝しています。もし私が長崎に行かなかったら、ずっと「原爆」をあやふやに知ってしまい将来大きな勘違いをしてしまったかもしれません。私のまわりには、まだまだ「原爆」を知らない人が多くいます。私はそのような人を一人でも減らせるようにこれから取り組んでいきたいと思います。少しでも、平和な未来に近づけるようにがんばります。本当にありがとうございました。

「平和について知ってほしいこと」

小金北中学校 3年 富田 愛夢

私は平和大使長崎派遣で、たくさんの方のことを聞き、考え、感じました。その中でも、特に印象に残っていることが二つあります。

一つ目は、被爆された方から直接お話を聞いたことです。その方は爆心地より1,500メートルのところで両手、両足、腹部を火傷したそうです。特に右足の火傷がひどく、足首が曲がらなくなり真っ直ぐ歩けなくなってしまったそうです。そのせいで小学校ではひどいいじめを受けました。さらに結婚相手には逃げられ、就職の際は被爆者だからと差別を受けたそうです。

私はその話を聞いて悲しくなりました。その方は被爆によりたくさん悩みを持っていました。被爆した方の中には、耐えられず自殺した方も少なくなかったそうです。そのような中、一生懸命生き抜こうとしている人をなぜいじめるのでしょうか。なぜ差別するのでしょうか。当時は普通だったのかもできません。ですが、それが普通であってはいけないと私は思いました。

その方はたくさん悩んだそうです。家族ともぶつかりました。ですが、最終的にはいじめに立ち向かい番長を倒したそうです。家族の支えがあったことが大きかったそうです。

被爆された方は、たくさんの方を失ったと思います。ですが、その分だけ、誰よりも強くなったのではないかと私は思いました。

二つ目は、参加させていただいた青少年ピースフォーラムで聞かせてもら

った歌の歌詞です。それは「どんな爆弾にだってできないことがある。君を優しく笑わせること。君にしか出来ないことがある。僕を優しく笑わせること。」というものです。これは、歌詞の一部分ですが、私はとても感動しました。

日本に原子爆弾が投下されて、幸せになった人が何人いたでしょうか。日本には一人もいなかったと思います。逆に、原爆を落とした人も少なかったと思います。テレビで原爆の投下に関わった米兵が「日本人には本当に申し訳ないと思っている。上からの指示で今は後悔しかない。」と話しているのを目にしたことがあります。

原爆をどう使っても世界は平和になりません。少し考えれば分かることです。それなのに、この世界には1万4,000発もの核兵器があります。人と人が話し合わない限り、認め合わない限り平和には近づきません。それに気付かない人がいることが、とても悲しいです。

今まで、被爆者への差別と核兵器について書きました。今、中学生の私がどれだけ良い案を思いついても、世の中は動きません。大人になってもきっと変わらないと思います。私に限らず、一人では無理な問題です。ですから、たくさんの人に知ってもらうことが必要だと思います。私が長崎で学んだことは、自分の中だけで止めてはいけないと思います。一人でも多くの人に伝えていかなければならないと思っています。少しでも平和な未来へ近づけるようお願い、努力していきたいと思います。

「平和大使になって学んだこと」

専修大学松戸中学校 2年 関野 七海

今回、長崎に行ったことで私は命の大切さ、被爆者の方の思いなどをたくさん学ぶことができました。

私が今回の派遣の中で一番印象深かったのは平和祈念式典での被爆者の方の言葉です。式典では被爆者の方々が歌や式辞で「もう戦争をしないでほしい」「二度と原爆で人を苦しめないでほしい」「こんな思いをするのは私たちだけでいい」と必死に世界中の人々に伝えている姿を見てとても感動しました。

被爆者の方々は原爆によって身体や心を壊されたのにもかかわらず、自分たちより世界中の人々のことを心配し、核兵器禁止を訴えているのだと分かったとき、私も何か被爆者や世界の人々のために行動したいと強く思いました。

そして、私はもう一つ今回の長崎派遣で感じたことがあります。

それは水についてです。長崎市には水を連想させられるものが数多くあります。それは被爆された方たちが水を求めていたからです。飲んだら亡くなるといわれていたため、誰もが心を鬼にして水をあげないようにしていました。けれども水をあげようがあげまいが次々と亡くなっていってしまいました。皆がとても後悔したそうです。そのため水を連想させるものをたくさん置き、亡くなった方々を追悼しています。

最後に被爆者の小峰さんがお母さんに言われた言葉にとても納得しました。お母さんは小さい頃の小峰さんに対し「アメリカやいじめてくる奴を憎むな。戦争や原爆を憎め。」と言ったそうです。小峰さんは被爆したせいで周りにいじめられていました。しかし、なぜアメリカやいじめてくる奴のことを憎んではないのか不思議だったといいます。けれども「アメリカ人が悪いわけではない。戦争を始めた政府が悪いのだ。」と大人になってから気付いたそうです。この言葉を聞き、力ではなく言葉で争いを解決すべきだと思いました。

長崎に行ったことで他人事だった原爆の脅威や生き抜いてきた長崎に人々の人生を実感することができました。悲しいことがあっても何が何でも生き抜くべきだと、前を向いて歩きだすべきだと思いました。

私はまだ、将来の夢が決まっていませんでした。しかし、今回長崎に行ったことで、世界中の人々に日本のことをもっと知ってもらえるような仕事に就きたいと思うようになりました。子どもでは大きなことはできないかもしれませんが、まずは周りの人に伝えていくという小さくとも重要なことをやっていきたいです。

派遣後の活動について



※学校から提供いただいた資料の一部を載せています

和名ケ谷中学校 飛田 美紅

平成30年9月3日（月）2学期始業式にて発表
学年だより（平成30年9月号）に掲載



松戸市立和名ケ谷中学校
学校だより

平成30年9月号

<http://www.matsudo.ed.jp/~wana-j/>

前記のように、中学生として健全で充実した夏休みを過ごしていた和名ケ谷中学生の中で、松戸市の「平和大使長崎派遣」という事業に参加をしてきた1年生女子がいます。夏休み後半にインタビューをしました。簡単に紹介します。

校長インタビュー

- 校長 まずはじめに、参加してきた感想を聞かせてください。
飛田さん 今まで戦争のことについては、テレビなど見て「かわいそうだな」しか思わなかったけど、この事業に参加して自分の身になって考えるようになりました。特に原子爆弾の大きさや温度については想像以上の驚きがありました。
- 校長 平和式典はどんな感じだったですか？
飛田さん 世界中から要人が来ていて、戦争がどれだけ残酷なことなのかもわかりました。被爆者の方たちが歌を歌ってくれたり、一生懸命に戦争の悲惨さを伝えていて、戦争はどれだけいけないものなのか学ぶことができました。
- 校長 その他のイベントはどのようなことがありましたか？
飛田さん ピースフォーラムに参加して、戦争とはどういうものなのか、なぜ起こるのか、起こらないようにするにはどうしたらよいのか。他の県から来ていた私たちと同じ平和大使たちと、学習したり話し合ったりしました。その後、防空壕を見に行きました。防空壕がどんなものなのか、この中にいても即死してしまうということも聞いて驚きました。
- 校長 他校の中学生とはどうでしたか？
飛田さん ホテルの部屋は、最初初めてのひとりで不安でしたが、すぐ仲良くなれて良かったです。寝る直前まで、遊んだり話をしたりしていました。松戸の解散の時、連絡先を交換してうれしかったです。
- 校長 お土産は？
飛田さん どこに行ってもカステラばかりでした。カステラを3箱とお揃いのストラップを買ってきました。おもしろいお店があって、いろいろな味のカステラを売っているお店がありました。
- 校長 そうか、さすが長崎。やっぱりカステラだね。ちゃんぼんは食べた？
飛田さん あんかけが苦手なので・・・最後の夕食はちゃんぼんも出てきてしたの麺を主に食べました。



ピースフォーラム会場にて



報告会 市長さん教育長さんの前で発表中

飛田さんは、2学期始業式にて、直接和生中にむけ今回の長崎訪問について話をしてもらいました。その内容については、和名ケ谷中学校ホームページの「今日の1枚」に掲載予定です。和名ケ谷小学校の校長先生からも、平和についての話を小学生にしてもらいたいというお話があり、日程を調整していきます。

金ヶ作中学校 小山 杏奈

森田 和佳奈

平成30年9月4日（火）活動報告会にて発表



〈小山さん〉



〈森田さん〉

第四中学校 安藤 聡真

平成30年10月30日（火）

文化祭にて発表



小金中学校 國崎 沙和子

平成30年10月30日（火）

文化祭にて発表



長崎平和宣言

73年前の今日、8月9日午前11時2分。真夏の空にさく裂した一発の原子爆弾により、長崎の街は無残な姿に変わり果てました。人も動物も草も木も、生きとし生けるものすべてが焼き尽くされ、廃墟と化した街にはおびただしい数の死体が散乱し、川には水を求めて力尽きたたくさんの死体が浮き沈みしながら河口にまで達しました。15万人が死傷し、なんとか生き延びた人々も心と体に深い傷を負い、今も放射線の後障害に苦しんでいます。

原爆は、人間が人間らしく生きる尊厳を容赦なく奪い去る残酷な兵器なのです。

1946年、創設されたばかりの国際連合は、核兵器など大量破壊兵器の廃絶を国連総会決議第1号としました。同じ年に公布された日本国憲法は、平和主義を揺るぎない柱の一つに据えました。広島・長崎が体験した原爆の惨禍とそれをもたらした戦争を、二度と繰り返さないという強い決意を示し、その実現を未来に託したのです。

昨年、この決意を実現しようと訴え続けた国々と被爆者をはじめとする多くの人々の努力が実り、国連で核兵器禁止条約が採択されました。そして、条約の採択に大きな貢献をした核兵器廃絶国際キャンペーン（ICAN）がノーベル平和賞を受賞しました。この二つの出来事は、地球上の多くの人々が、核兵器のない世界の実現を求め続けている証です。

しかし、第二次世界大戦終結から73年たった今も、世界には14,450発の核弾頭が存在しています。しかも、核兵器は必要だと平然と主張し、核兵器を使って軍事力を強化しようとする動きが再び強まっていることに、被爆地は強い懸念を持っています。

核兵器を持つ国々と核の傘に依存している国々のリーダーに訴えます。国連総会決議第1号で核兵器の廃絶を目標とした決意を忘れないでください。そして50年前に核不拡散条約（NPT）で交わした「核軍縮に誠実に取り組む」という世界との約束を果たしてください。人類がもう一度被爆者を生む過ちを犯してしまう前に、核兵器に頼らない安全保障政策に転換することを強く求めます。

そして世界の皆さん、核兵器禁止条約が一日も早く発効するよう、自分の国の政府と国会に条約の署名と批准を求めてください。

日本政府は、核兵器禁止条約に署名しない立場をとっています。それに対して今、300を超える地方議会が条約の署名と批准を求める声を上げています。日本政府には、唯一の戦争被爆国として、核兵器禁止条約に賛同し、世界を非核化に導く道義的責任を果たすことを求めます。

今、朝鮮半島では非核化と平和に向けた新しい動きが生まれつつあります。南北首脳による「板門店宣言」や初めての米朝首脳会談を起点として、粘り強い外交によって、後戻りすることのない非核化が実現することを、被爆地は大きな期待を持って見守っています。日本政府には、この絶好の機会を生かし、日本と朝鮮半島全体を非核化する「北東アジア非核兵器地帯」の実現に向けた努力を求めます。

長崎の核兵器廃絶運動を長年牽引してきた二人の被爆者が、昨年、相次いで亡くなりました。その一人の土山秀夫さんは、核兵器に頼ろうとする国々のリーダーに対し、こう述べています。「あなた方が核兵器を所有し、またこれから保有しようとするのは、何の自慢にもならない。それどころか恥ずべき人道に対する犯罪の加担者となりかねないことを知るべきである」。もう一人の被爆者、谷口稜暉さんはこう述べました。「核兵器と人類は共存できないのです。こんな苦しみは、もう私たちだけでたくさんです。人間が人間として生きていくためには、地球上に一発たりとも核兵器を残してはなりません」。

二人は、戦争や被爆の体験がない人たちが道を間違えてしまうことを強く心配していました。二人がいなくなった今、改めて「戦争をしない」という日本国憲法に込められた思いを次世代に引き継がなければならないと思います。

平和な世界の実現に向けて、私たち一人ひとりに出来ることはたくさんあります。

被爆地を訪れ、核兵器の怖さと歴史を知ることはその一つです。自分のまちの戦争体験を聴くことも大切なことです。体験は共有できなくても、平和への思いは共有できます。

長崎で生まれた核兵器廃絶一人署名活動は、高校生たちの発案で始まりました。若い世代の発想と行動力は新しい活動を生み出す力を持っています。

折り鶴を折って被爆地に送り続けている人もいます。文化や風習の異なる国の人たちと交流することで、相互理解を深めることも平和につながります。自分の好きな音楽やスポーツを通して平和への思いを表現することもできます。市民社会こそ平和を生む基盤です。「戦争の文化」ではなく「平和の文化」を、市民社会の力で世界中に広げていきましょう。

東日本大震災の原発事故から7年が経過した今も、放射線の影響は福島の方々を苦しめ続けています。長崎は、復興に向け努力されている福島の方々を引き続き応援していきます。

被爆者の平均年齢は82歳を超えました。日本政府には、今なお原爆の後障害に苦しむ被爆者のさらなる援護の充実とともに、今も被爆者と認定されていない「被爆体験者」の一日も早い救済を求めます。

原子爆弾で亡くなられた方々に心から追悼の意を捧げ、私たち長崎市民は、核兵器のない世界と恒久平和の実現のため、世界の皆さんとともに力を尽くし続けることをここに宣言します。

2018年（平成30年）8月9日

長崎市長 田上富久

以下、長崎平和宣言（ことばの解説）から抜粋

1. 放射線の後障害

原爆による放射線障害は、急性障害と後障害に分けられます。急性障害は大量の放射線を浴びたときに出る症状で、嘔吐、下痢、発熱、皮下出血などを発症し、多くの人々が死亡しました。後障害は、被爆して数年から数十年してから現れる症状で、がんや白血病、白内障などがあります。1946（昭和21）年初めから、火傷が治ったあとが盛り上がるケロイド症状が現れました。また、母親の胎内で被爆した胎内被爆児は出生後も死亡率が高く、死を免れなくても小頭症などの症状が現れることもありました。さらに、1950（昭和25）年頃からは、白血病、甲状腺がん、乳がん、肺がんなど様々な病気の発生率が高くなり始めました。

放射線が年月を経て引き起こす影響については、未だ十分に解明されておらず、調査や研究が今も続けられています。

※原爆による被害は、放射線以外にも熱線によるやけどや爆風による傷害などもあります。

2. 核兵器禁止条約

核兵器は一旦使用されれば、地球に大きな被害を与えるだけでなく、存在する限り、誤って使われたり、テロなどに使われたりする危険性があります。NPT（4で解説）で約束した核軍縮を守らない5か国にいらだった国々の間で、この危険な核兵器を法的に禁止しようとする動きが、2010（平成22）年頃から高まってきました。

そして、そのような核兵器を持たない国々の主導のもと、三度にわたる核兵器の非人道性を考える国際会議の開催、核軍縮に関する国連作業部会の開催、国連での核兵器禁止条約に向けた交渉会議を経て、2017（平成29）年7月、国連加盟国の6割を超える122か国が賛成し、核兵器禁止条約が採択されました。

条約の前文には被爆者の苦しみと被害を深く心に留めるとしてあります。被爆者の「私たちの経験を、もう、だれにもさせたくない」という

願いを、国際社会がしっかりと受けとめました。

しかし、採択されただけでは、条約は力を持ちません。本当に力を持つためには、それぞれの国の法律で条約を認め、締結する意志を最終的に決定しなければなりません。これを「批准」と言います。その批准国が50か国となることで、条約は「発効」し、初めて力を持ちます。

日本を含む核兵器に依存する国々などは、条約に今も署名しないとしています。条約が発効すれば、それらの国に対する批判や圧力が高まり、核軍縮を進める力となることが期待されています。

【核兵器禁止条約を巡る動き】

1995（平成7）年11月 核兵器使用の違法性を問う国際司法裁判所の審理で広島、長崎両市長が意見陳述

1996（平成8）年7月 国際司法裁判所が、一発で無差別に人々を殺傷する核兵器を使用することは、「人道法の原則及び規則に一般的に違反する」と警告

2010（平成22）年4月 国際赤十字委員会総裁が「核兵器の非人道性」をもとに、核兵器の禁止と廃絶を訴える

2010（平成22）年5月 NPT再検討会議で、核軍縮のための行動計画に「すべての国が常に国際人道法を含む全ての国際法を順守する必要性を再確認する」との文言を盛り込む

2013（平成25）年3月、2014（平成26）年2月、12月 第1回ノルウェー、第2回メキシコ、第3回オーストリアで「核兵器の非人道性に関する国際会議」を開催

2015（平成27）年4月 NPT再検討会議で、核軍縮に関する国連作業部会を設置することを警告

2016（平成28）年12月 国連総会で、条約の制定交渉会議を2017年に開始することを求める決議文を採択

2017（平成29）年3月 条約の制定交渉会議が始まる

2017（平成29）年7月 条約の制定交渉会議で核兵器禁止条約が賛成多数で採択

2017（平成29）年9月 国連総会で条約の調印開始

3. 核兵器を持つ国々と核の傘に依存している国々

相手国が攻撃してきた場合、核兵器で反撃するという姿勢を見せることによって相手国の攻撃を思いとどませようとするのを、核兵器の抑止力といいます。しかし、抑止力に固執すると、お互いに相手国より強力な核兵器を保有したり開発しようとしたりするために、核の拡散につながり、逆に核兵器による攻撃の危険性が高まる可能性があります。

日本や韓国、NATO（北大西洋条約機構）に加盟する非核保有国は、いずれも核兵器は保有していませんが、アメリカの持つ核兵器の抑止力を「核の傘」に例えて、その抑止力に依存している国々です。

これに対し、核兵器の抑止力に頼らない方法で国の安全を保障しようとする考え方を、「非核の傘」といいます。長崎市は、その現実的で具体的な方法として、北東アジア非核兵器地帯（6で解説）を提案しています。

4. 核不拡散条約（NPT）

核不拡散条約（NPT）は、核保有国が増える（核が拡散する）ことを防ぐ目的でつくられた条約で、1970（昭和45）年に発効しました。2003（平成15）年1月に一方的に脱退を表明している北朝鮮も含めると、現在の国連加盟国の中で、インド、パキスタン、イスラエル、南スーダンの4か国を除く191か国・地域が加入しています。

主な内容は、以下の3つです。

（1）「核不拡散」

当時、すでに核兵器を保有していたアメリカ・ロシア（旧ソビエト）・イギリス・フランス・中国の5か国だけに核兵器の保有を認め（核兵器国）、それ以外の国（非核兵器国）が保有することを禁止しています。

（2）「核軍縮」

全廃に向けて核兵器を減らしていく努力を核兵器国に約束させる代わりに、この5か国だけが当面は核兵器を持つことを認め、それ以外の

国が新たに持つことを禁じています。

（3）「原子力の平和的利用」

非核兵器国には、原子力の平和利用が認められており、原子力技術や核物質を使用する場合は、必ずそれが平和利用であるかどうかを確認するために、国際原子力機関（IAEA）の検査を受ける義務があります。

・再検討会議

核不拡散条約（NPT）では、条約が定める義務の履行状況を確認し、締約国の取り組みを強化するため、5年毎に再検討会議と、その間に3回から4回の準備委員会が開催されます。

2015（平成27）年の再検討会議において、参加国の多くが核兵器の非人道性（一発で多くの人々を無差別に殺傷する核兵器を使用することは、人間として許されないこと）に言及し、核兵器禁止に向けた法的枠組みについての議論を速やかに開始すべきであると訴えました。

2018（平成30）年4月23日から5月4日まで開催された、2020年核不拡散条約（NPT）再検討会議第2回準備委員会は、核兵器禁止条約が採択されて初めて開催される準備委員会でしたが、核兵器禁止条約を巡る核兵器に依存する国々と核兵器を持たない国々との対立は深まったと指摘される一方、NGO、被爆者団体、若者などの市民社会の存在感に期待する声も上がりました。

5. 南北首脳による「板門店宣言」や初めての米朝首脳会談

1910（明治43）年から日本の統治下となっていた朝鮮半島は、第二次世界大戦終結後、北緯38度線を境に、北側を旧ソビエト（現ロシア）が、南側をアメリカが占領することになり、それまでひとつの国だった朝鮮民族が分断されました。1948（昭和23）年に、韓国と北朝鮮の両国ができたことにより、分断は深まりました。そして、1950（昭和25）年6月25日、北朝鮮が南下したことで、朝鮮戦争が始まりました。多くの死者を出したこの戦争は1953（昭和28）年

に休戦しましたが、いつ戦闘が始まるかもしれない緊張した関係がいままで続いていました。

そのような中、今年4月27日、軍事境界線である板門店で、韓国の文在寅大統領と北朝鮮の金正恩朝鮮労働党委員長が南北首脳会談を行い、会談の成果として発表された「板門店宣言」で、年内での朝鮮戦争の終結と、朝鮮半島の非核化に向けて努力する意志を示しました。

そして、南北首脳会談後の6月12日、シンガポールで、アメリカのトランプ大統領と北朝鮮の金委員長が初めての米朝首脳会談を開き、アメリカは北朝鮮の体制の保証を約束すること、同時に、北朝鮮は朝鮮半島の非核化に取り組むことを確認し、共同声明を発表しました。

長く対立していたアメリカと北朝鮮の首脳会談は歴史的な一歩となり、今後の動向が注目されています。

6. 「北東アジア非核兵器地帯」

地域の国々が条約を結び、核兵器の製造、実験、取得、保有などをしないと約束した地域のことを「非核兵器地帯」といいます。条約によって核戦争の危機をなくし、国際的な緊張をやわらげることで、核兵器の役割を減らし、核保有国が核兵器を開発したり、保有したりする動機をなくしていくことにもつながります。

地球の南半球は、1967（昭和42）年のラテン・アメリカ核兵器禁止条約のほか4つの条約（南極条約、南太平洋非核地帯条約、アフリカ非核兵器地帯条約、東南アジア非核兵器条約）によって、すでに陸地のほとんどが非核化されています。

北半球でも、1998（平成10）年にモンゴルの「非核地位」が国連で認められ、2009（平成21）年には中央アジア（ウズベキスタン、タジキスタン、キルギス、トルクメニスタン、カザフスタン）非核兵器地帯条約が発効されています。

「北東アジア非核兵器地帯」とは、日本と韓国と北朝鮮の3か国を「非核兵器地帯」にしようとするものです。条約が実効力を持つためには、

3か国に核兵器が存在せず、近隣の核保有国（アメリカ、ロシア、中国）が、3か国を核兵器で攻撃をしないと約束することが必要になります。

朝鮮半島の平和に向けた国際的な動きを千載一遇の好機として、北東アジア全体の平和のために日本政府が果たすべき役割は大きいと言えます。

7. 折り鶴

日本で鶴は縁起のよいものとされ、願いをこめて折り紙で鶴を折るという文化が古くからあります。千羽折ると願いが叶う、これが千羽鶴です。

広島原爆で被爆した佐々木禎子さんは、白血病の闘病を続けながら、回復を祈って鶴を折り続けましたが、12歳の若さで亡くなりました。広島平和記念公園の「原爆の子」のモデルとして、禎子さんと折り鶴は、平和のシンボルになっています。広島と長崎には、毎年全国各地からたくさんの千羽鶴が届いています。

イタリア北部エミリア・ロマーニャ州に住んでいる長崎市出身の豊島文さんと、マッシモ・ベルサーニさん夫妻は、イタリアの子どもたちに鶴を折りながら、折り鶴の持っている意味や平和の大切さを伝えるという平和授業を行っています。できた折り鶴は、長崎市内の小学校に送られています。

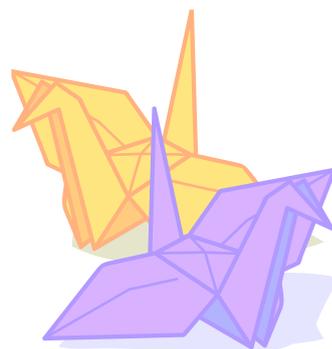
歴代平和大使名簿



～ 歴代平和大使名簿 ～

年度	No.	氏名 (学校名)
平成二十年度(二〇〇八年)	1	熊川 実旺 (第四中 2年)
	2	別宮 賢治 (第五中 2年)
	3	渡邊 ちさと (六実中 3年)
	4	片野 結依 (小金南中 1年)
	5	清水 のどか (古ヶ崎中 1年)
	6	藤井 彩乃 (新松戸南中 2年)
	7	清水 健人 (金ヶ作中 1年)
	8	神部 莉奈 (新松戸北中 2年)
	9	山本 拓実 (旭町中 3年)
	10	黒木 若葉 (聖徳大学附属中 1年)
平成二十一年度(二〇〇九年)	1	川本 景介 (第一中 1年)
	2	鈴木 亜加里 (第二中 1年)
	3	小幡 祐太 (第三中 1年)
	4	山田 政明 (第四中 1年)
	5	清水 彬奈 (第五中 1年)
	6	久佐野 美奈子 (第六中 1年)
	7	増野 友梨奈 (小金中 2年)
	8	井山 陽菜 (常盤平中 2年)
	9	小林 美幸 (栗ヶ沢中 1年)
	10	熊川 大揮 (六実中 1年)
	11	高島 里夏 (牧野原中 3年)
	12	西 志穂 (河原塚中 3年)
	13	工藤 颯人 (根木内中 1年)
	14	四家 明宜 (金ヶ作中 1年)
	15	児島 一華 (和名ヶ谷中 1年)

年度	No.	氏名 (学校名)
平成二十二年度(二〇一〇年)	1	櫻井 和奏 (第一中 2年)
	2	吉田 彩乃 (第二中 1年)
	3	三橋 若奈 (第三中 1年)
	4	笹本 幸輝 (第四中 2年)
	5	比嘉 祐哉 (第五中 2年)
	6	後藤 奈穂美 (第六中 1年)
	7	神部 ちひろ (小金中 2年)
	8	田中 萌加 (常盤平中 1年)
	9	高梨 望 (栗ヶ沢中 2年)
	10	岸田 穰士 (六実中 2年)
	11	大山 祭 (小金南中 1年)
	12	渡邊 誠嗣 (古ヶ崎中 2年)
	13	梶浦 美樹 (牧野原中 2年)
	14	斉藤 温人 (根木内中 1年)
	15	富永 由也 (河原塚中 1年)
	16	石井 拓海 (新松戸南中 2年)
	17	中川 剛志 (金ヶ作中 1年)
	18	向田 美紀子 (和名ヶ谷中 3年)
	19	山本 ありさ (旭町中 2年)
	20	新倉 花菜 (小金北中 1年)
	21	田村 陽香 (聖徳大学附属女子中 2年)
	22	染谷 日向子 (専修大学松戸中 1年)



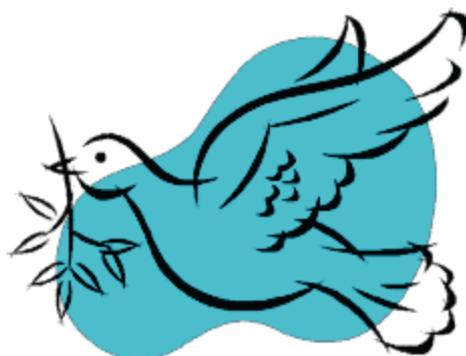
年度	No.	氏名 (学校名)
平成二十三年 度(二〇二一年)	1	佐藤 萌加 (第一中 2年)
	2	発地 空介 (第三中 1年)
	3	岸 健太 (第四中 1年)
	4	宗像 未来 (第五中 1年)
	5	天野 七海 (第六中 1年)
	6	紙崎 莉緒 (小金中 2年)
	7	井山 祥樹 (常盤平中 2年)
	8	加藤 円来 (栗ヶ沢中 1年)
	9	鈴木 理花子 (六実中 3年)
	10	坂本 実優 (小金南中 1年)
	11	谷口 茉奈美 (古ヶ崎中 1年)
	12	對馬 あい子 (牧野原中 2年)
	13	山田 真平 (河原塚中 2年)
	14	新垣 峻太 (新松戸南中 3年)
	15	水谷 春来 (金ヶ作中 2年)
	16	長谷川 結友 (旭町中 3年)
	17	板倉 日向子 (小金北中 1年)
	18	張 敏 (聖徳大学附属女子中 2年)
	19	平野 瑞帆 (専修大学松戸中 2年)

年度	No.	氏名 (学校名)
平成二十四年 度(二〇二二年)	1	阿部 秀大 (第一中 2年)
	2	茂出来 美樹 (第二中 3年)
	3	小澤 美羅 (第三中 3年)
	4	笠原 卓斗 (第四中 1年)
	5	播磨 渚生 (第五中 3年)
	6	内海 渚 (第六中 1年)
	7	大津 みちる (小金中 3年)
	8	小俣 さやか (常盤平中 1年)
	9	佐藤 優海香 (常盤平中 1年)
	10	阿部 裕美 (六実中 1年)
	11	宮本 龍一 (小金南中 3年)
	12	樋口 杏 (古ヶ崎中 1年)
	13	高橋 あみ (牧野原中 2年)
	14	遠藤 未羽 (根木内中 2年)
	15	後藤 陽 (河原塚中 1年)
	16	鈴木 里歩 (新松戸南中 2年)
	17	岩崎 いぶき (和名ヶ谷中 1年)
	18	伊藤 梢 (和名ヶ谷中 3年)
	19	紀藤 颯斗 (旭町中 1年)
	20	川村 香奈美 (小金北中 1年)
	21	石井 そら (聖徳大学附属女子中 2年)
	22	中山 皓一郎 (専修大学松戸中 1年)



年度	No.	氏名 (学校名)
平成二十五年 度(二〇一三年)	1	藍原 由梨奈 (第一中 1年)
	2	河野 圭吾 (第二中 1年)
	3	福田 友郁 (第三中 2年)
	4	旗谷 幸亮 (第四中 1年)
	5	宮島 健吾 (第五中 3年)
	6	後藤 美菜 (第六中 3年)
	7	関川 美海 (小金中 2年)
	8	金澤 春樹 (小金中 1年)
	9	阿部 雅治 (常盤平中 3年)
	10	中澤 有稀 (栗ヶ沢中 2年)
	11	加藤 一紗 (六実中 1年)
	12	島田 悠 (小金南中 1年)
	13	大久保 愛深 (古ヶ崎中 1年)
	14	緑間 喜子 (古ヶ崎中 1年)
	15	毎熊 和正 (牧野原中 2年)
	16	猪瀬 柊斗 (牧野原中 1年)
	17	奥野 智朗 (河原塚中 3年)
	18	平野 茜 (新松戸南中 1年)
	19	下藤 誉司 (和名ヶ谷中 1年)
	20	新倉 拓真 (小金北中 1年)
	21	郡司 萌 (聖徳大学附属女子中 2年)
	22	星 さりあ (専修大学松戸中 1年)

年度	No.	氏名 (学校名)
平成二十六年 度(二〇一四年)	1	布川 恭大 (第一中 2年)
	2	白井 悠生 (第二中 2年)
	3	松本 優樹 (第二中 2年)
	4	本間 宏明 (第三中 2年)
	5	旗谷 吏紗 (第四中 3年)
	6	宮島 加奈子 (第五中 1年)
	7	植田 聖杜 (第六中 2年)
	8	合田 健太郎 (小金中 2年)
	9	早崎 諒 (常盤平中 2年)
	10	小井土 瑠冴子 (栗ヶ沢中 1年)
	11	望月 優衣 (六実中 3年)
	12	片野 玲奈 (小金南中 1年)
	13	和田 晴人 (古ヶ崎中 2年)
	14	對馬 悠介 (牧野原中 2年)
	15	井手 麟太郎 (根木内中 2年)
	16	樋口 明日香 (河原塚中 1年)
	17	斎藤 龍秀 (新松戸南中 1年)
	18	久保田 美咲 (和名ヶ谷中 2年)
	19	紀藤 菜桜 (旭町中 1年)
	20	渡邊 龍 (小金北中 1年)
	21	野中 利悦 (聖徳大学附属女子中 2年)
	22	築田 真理子 (専修大学松戸中 3年)



年度	No.	氏名 (学校名)
平成二十七年 度(二〇一五年)	1	服部 叶汰 (第一中 1年)
	2	瀬谷 恭平 (第二中 2年)
	3	長谷川 勇矢 (第三中 2年)
	4	朝生 蘭 (第四中 1年)
	5	田島 歩夢 (第四中 3年)
	6	佐藤 駿太 (第五中 1年)
	7	小林 優人 (第六中 2年)
	8	山下 優月 (第六中 2年)
	9	田崎 和 (常盤平中 1年)
	10	須藤 巧 (小金南中 1年)
	11	萩原 真央 (小金南中 1年)
	12	大久保 敦康 (古ヶ崎中 1年)
	13	倉重 はるか (古ヶ崎中 2年)
	14	清水 智也 (牧野原中 2年)
	15	木村 史来 (牧野原中 1年)
	16	吉田 真帆 (河原塚中 1年)
	17	飯銅 千尋 (和名ヶ谷中 2年)
	18	井上 未来 (旭町中 2年)
	19	島岡 里帆 (小金北中 1年)
	20	藤井 友紀 (聖徳大学附属女子中 2年)
	21	山田 佳那 (聖徳大学附属女子中 2年)
	22	福島 有香 (専修大学松戸中 3年)

年度	No.	氏名 (学校名)
平成二十八年 度(二〇一六年)	1	梶原 望音 (第一中 1年)
	2	新井 しほり (第二中 2年)
	3	山本 遥香 (第三中 2年)
	4	大住 春紀 (第四中 1年)
	5	埴 悠莉乃 (第五中 1年)
	6	三橋 世那 (第六中 1年)
	7	山崎 夏海 (小金中 2年)
	8	千葉 京香 (常盤平中 1年)
	9	須藤 未来 (小金南中 1年)
	10	坂本 聖 (小金南中 2年)
	11	相馬 結子 (古ヶ崎中 1年)
	12	中村 莉子 (古ヶ崎中 1年)
	13	水谷 寛樹 (牧野原中 1年)
	14	工藤 翼 (根木内中 1年)
	15	長田 結 (根木内中 2年)
	16	吉田 香凜 (河原塚中 1年)
	17	板橋 来美 (新松戸南中 1年)
	18	中川 和泉 (金ヶ作中 1年)
	19	本田 真樹 (和名ヶ谷中 2年)
	20	羽坂 美柚 (聖徳大学附属女子中 2年)
	21	白石 優美香 (専修大学松戸中 1年)
	22	星名 優歩 (専修大学松戸中 2年)



年度	No.	氏名 (学校名)
平成二十九年(二〇一七年)	1	高橋 聖奈 (第一中 2年)
	2	中木 源 (第二中 3年)
	3	見城 希音 (第三中 1年)
	4	角田 結菜 (第四中 1年)
	5	旗谷 優衣 (第四中 1年)
	6	伊藤 姫那 (第五中 1年)
	7	西田 翼 (第六中 1年)
	8	岡村 タイニー 美波 (小金中 1年)
	9	橋本 尚紀 (小金中 3年)
	10	小池 彩華 (常盤平中 2年)
	11	林 隆正 (栗ヶ沢中 1年)
	12	永野 礼華 (小金南中 2年)
	13	村田 和航 (古ヶ崎中 3年)
	14	榎田 朱里 (牧野原中 1年)
	15	北山 風香 (河原塚中 1年)
	16	スッティブン 凜 (河原塚中 1年)
	17	戸田 美智華 (新松戸南中 1年)
	18	田中 みなみ (金ヶ作中 1年)
	19	佐藤 古都 (和名ヶ谷中 2年)
	20	松本 歌子 (和名ヶ谷中 2年)
	21	中村 葵 (聖徳大学附属女子中 2年)
	22	堀越 菜々 (専修大学松戸中 3年)





平成30年度
平和大使長崎派遣事業報告書
伝える
～ PEACE & LOVE ～

松戸市
総務部総務課

平成30年12月発行